
現実

新品の靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実

【著者名】

新品の靴

【Zマーク】

Z5708Z

【あらすじ】

その少年はこう思った。
穴を掘るつ。

その少年はいつ頃った。

穴を掘る。

深さは約5メートル。

そこには何も入れない。

だけど何かを入れるようにする。
要するに落とし穴だ。

そして少年はわざと裏山へ出かけて行つた。

その少年は賢かつた。

穴の底には衝撃を和らげるためやわらかい土を軽く盛つておき、落とし穴を落とし穴だとわからせないようにするために穴の上にシートを薄くかぶせ、周りと同化するよう表面に周りと同じ色の土を薄くかぶせた。そして罠が機能するかどうか実際に試した。

よし、これならちゃんと罠として機能する

持つてきた梯子で穴から抜け出す間、少年は計画がうまく進んでいることを再確認した。

もう一度、シートをかぶせ、カモフラージュを施す。

ちゃんとひっかかるんだろうか

不安に思いながらも少年はその場を後にする。

翌日。

少年は不安と期待を滲ませながらポイントへ向かった。

すると

そこには

何も。

落ち着け。

少年は自分を抑えた。

こんなところに人なんて来るはずがないだろう？

弱気が少しずつ溢れだす。

こんなことやつていいのかよ

大丈夫。大丈夫。絶対にひつかかる。

少年は根拠はないが確信はしていた。

次の日。

何もない。

その次の日。
何もない。

その次の日。

なにも・・・

穴が。崩れてる・・・

落ち着け。

少年は用心深かつた。
ほふく前進で静かに穴を覗く。

そこに、
そこに、男の人があった。

高そうなステッツ、高級そうな時計、いかにもエリートな雰囲気を醸し出していた。

ただ土まみれではあつたけれど。

「落ち着け。論理的に考える。ここからどうするかだ。まずはこの状況を開拓することを考えるんだ。」

彼は冷静だった。

「こんにちは。

少年は声をかけてみた。

すると彼は毅然とした態度でこいつ答えた。

「やあ。・・・そうか、君がこの穴を創つたんだね?早くここから出してほしいんだが。」

それは無理です。

「どうしてだね?君が創つたんだりう?」

僕の質問に答えてください。

「質問?答えたらちゃんとここから出してくれるのか。」

はい。・・・ここに梯子があります。質問に答えたらいの梯子をそちらへ渡します。

「保証はあるのか?」

信じてもいいしかありません。

「まあ・・・仕方ない。早く質問しろ。」

「どうしてこんなところにきたんですか？」

「やはりその質問が来るか。その質問に答えたらいつじててくれるんだな？」

答えに依りますが。

「どうしてここに来たのか。それも携帯など連絡手段も持たずには何も持たずにどうしてこんな場所に来たのか。確かに君が質問するのももつともなことだ。それを聞きたいが為にこんな大掛かりな罠をしかけたのか？」

質問に答えてください。

「わかったよ。質問に答える。私がここに来たのは、人に会つためだ。」

会つため？誰に？

「私の大切な人だ。」

どうしてこんな場所で会つ必要が？今どこにいるんですか？

「そんなに動搖するな。誰も君を襲いに来やしないよ。彼女はもう死んでるんだ。」

彼はすっとそんな事を口にした。彼の目にいろいろな感情の色が現れる。

死んでる？

「そう、死んでる。この道の奥を行くと見晴らしのいい場所に出るだろ。彼女はそこが好きでね。そこに遺骨を埋めたんだ。」

少し寂しげに彼はそう語つた。

少年が無言でいると、彼は最初の彼に戻つてこう言った。

「さ、質問には答えただろ？ここから出してくれ。」

死んだのに、まだ会いに来てるんですか？

「おいおい。質問タイムはもう終わりだぞ。早くここから出してくれ。」

まだです。まだ聞きたいことがある。

「おいおい・・・ここから出してくれるんじゃなかったのかよ。」

彼の目に落胆の色が映る

もう死んでるのこまだ会いに来てるんですか？

「そうだよ。お子ちゃんにはわかんねえんだよ。」

お子ちゃんって・・・僕もう高校生なんですが。

・・・僕も、あなたと一緒にその人に会いにいってもいいですか？
「・・・いいけど別に。なら早く出してくれ。」

僕はそつと梯子を手渡す。

「まさか本当に出してくれるとほな・・・。最悪の事態を覚悟して
いたから良かつたよ。ほんとに。」

さあ、行きましょう。

僕と彼そろって歩く。

彼女に会ったあと、遠くの景色を見ながら彼は言つた。

「さあ、帰るか」

僕は聞く。

孤独なんですか？

「・・・当たり前だろうが。お前だつてそうだしつ。」

「だから穴を創つたんだろう？」

・・・はい。
「あまりにも孤独で、君は繫がりに飢えていたんだ。誰かを捕まえ
よつとして、罠を仕掛けた。」

・・・はい、確かに、そうです。全部分かってたんですか？

「まあね。君の目には孤独がいつも映つてる。」
僕は、どうしたらいいんでしょう？
迂闊にも心がゆるんでしまい涙がこぼれなくなる。

だめだ、もつと強く。

「どうってねえ・・・人間こんなもんだよ。」

彼の言葉からは何の救いもなかつた。

「じゃあな少年。元氣でな。いくら孤独に飢えてるからつて穴を掘るのはもうよせよ。」

そういうつて彼は行つてしまつた。

所詮こんなものだ。

人との出会いとは。

現実は小説みたいに上手くはいかない。

衝撃的な出会いや運命の出会いなんてあるわけもなく。たとえあつたとしても大半の人は体験し得ない。

そうやつて人生が過ぎていく。

彼と出会つたつてなんにもならなかつた。これから彼と交流があるわけでもなく。僕や彼の人生が変わるわけでもなく。

結局現実はこんなもんだ。

人は自分がいちばん大切。

見ず知らずのやつに心を許すはずがない。

近道なんてないんだ。自分にピッタリの相手なんていない。ゆつくりと、傷つきながらも、相手との距離を縮めていくしかない。

現実に、田を向けるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708n/>

現実

2010年10月9日19時40分発行